

起倒流柔道について

— 流名. 術理及びその思想 —

藤 堂 良 明・小 俣 幸 嗣

KITO-RYU-JUDO

— Origin of the name, techniques and philosophy —

TODO Yoshiaki, KOMATA Kouji

This study is aimed at explaining the origin of the name, techniques and philosophy of KITO-RYU-JUDO, founded at the about middle of Edo era, and felt to be used the term judo in its nomenclature.

The following results were obtained.

- 1) Kunitaka Suzuki, the fifth successor of KITO-RYU-KUMIUCHI changed the name from KITO-RYU-KUMIUCHI to KITO-RYU-JUDO in 1741. He adopted SHINBU-NO-MICHI being transmitted from generation to generation in his family, and named KITO-RYU-JUDO.
- 2) The doctrine of KITO-RYU-JUDO included not only the mastery of techniques for battle, but also a philosophical approach to conducting ones life based on the law of nature and a way of virtue.
- 3) KITO-RYU-NO-KATA consisted of Omote 14 tricks and Ura 7 tricks. This Kata taught to keep balance and Kuzusi and Kake. Especially Yoko-stemi-waza, Tani-otoshi and Seoi-Nage have considerable influenced upon the KODOKAN-JUDO.

Key word : KITO-RYU. JUDO. KUMIUCHI. Kunitaka Suzuki. Kata.

1. はじめに

柔道というと、一般に講道館柔道が歴史上最初に現れたと考えられているようだ。しかし、嘉納治五郎は講道館柔道を創始するにあたり「私が普通行われている柔術という言葉を用いないで、何デ殊更に唯々高尚な一二の流儀のみで用いていました處の柔道という名称を付けましたかの説明を致しましょう¹⁾」と述べ、自ら柔術流派の中に柔道という名称があったと説いている。実際そのうちの一つは、松江藩（島根県）で行われていた直信流であり、井上正順が享保九年（1724）にそれまでの柔術という名称を改変し、直信流柔道として公表し、歴史上初めて柔道の名称を使ったこと

で有名である。詳しいことは拙著『武道学研究二十二巻第3号』をご覧ください。

ところで、桜庭武は『柔道史攷』の中で起倒流をとりあげ「起倒流柔術鑑組討云々とて、柔術と呼びたるものもあるけれども、伝書の中には明らかに『起倒流柔道體の巻』とあるもの、『起倒流柔道総論』と書きたるものあり。～中略～松平定信の『退閑雜記』にも、第四巻に『乙卯十一月九日柔道の本體の伝を得てけり』と云ふ記事がある²⁾」等と記し、起倒流柔道なるものがあった、と説いている。しかしこれまで、起倒流柔術に関する研究はいくつか散見されるが^{註1)}、起倒流柔道についての研究はほとんど成されていない

い。

こうしたことから、今回は江戸中期に栄え、又講道館柔道の基礎ともなった起倒流に焦点を絞り、次のような点について考察してみた。まず最初に、いつ頃、誰が、どういう経緯で起倒流柔道を創ったのか、次に柔術ではなく、あえて柔道という名辞を使った思想的根拠はどこにあったのか、最後に起倒流柔道の技には如何なるものがあり、どのように講道館柔道に導入されていったのか。以上三つの点について、近世の武道伝書類を基に明らかにしたいと思う。

2. 起倒流柔道の流名について

起倒流は、茨木又左衛門専斎により始められた流派である。徳川家光の頃に新陰柳生流伝書に「乱のこと又左衛門工夫の目録」として「起倒流乱目録」がある。寛永十四年（1637）に書かれた伝書には次のように記されている。「体すぐなるにより、勝ある心なり。出て入る心持、平、敵に従いまわり居る身すぐなり、請拍子いきの大事。右の三つは、体と身拍子と、心之請と此三つの稽古也～中略～ 右の一卷は兵法之心持を似、奇妙得心誠に神妙にかなへる処なり。然とも尋入たよりなきにより、名を乱と名づけ、右之一巻を書して心持を沢庵へ御物語申せば、則起倒流とあそばし、習の心持に模稜手と名付給也³⁾」と記され、茨木専斎の編み出した「乱」に、起倒流と名付けたのは禅僧沢庵であったことが窺える。そして当時は起倒流乱と呼ばれていた。起倒流の系図を『武芸流派大辞典』を基に作製すると、図1のようになる。

これによると、起倒流では茨木専斎の後、寺田満英が現れ「起倒流組討ちと改る元祖⁴⁾」として「乱」を省き、「起倒流組討」の名目で広めていった。この寺田満英は身長151センチメートルほどの小さな体格であったが、武者修行中「僧沢庵について不動体不動智の妙理を発見し、その後林道春（羅山）に儒学を学び遂に一家をなした。そして出雲に帰る禄二百石を賜って師役となった⁵⁾」とされる。そして満英の作とされる『柔説』には「若しかりに難行苦行を積んで柔の道に達し、誰にも負けない程の強さになったとしても、常に外柔内剛ということは忘れてはならぬ。決して内柔外剛の士になってはならぬ⁶⁾」とも記され、寺田満英はまだ柔道という語は使わなかったが、柔の

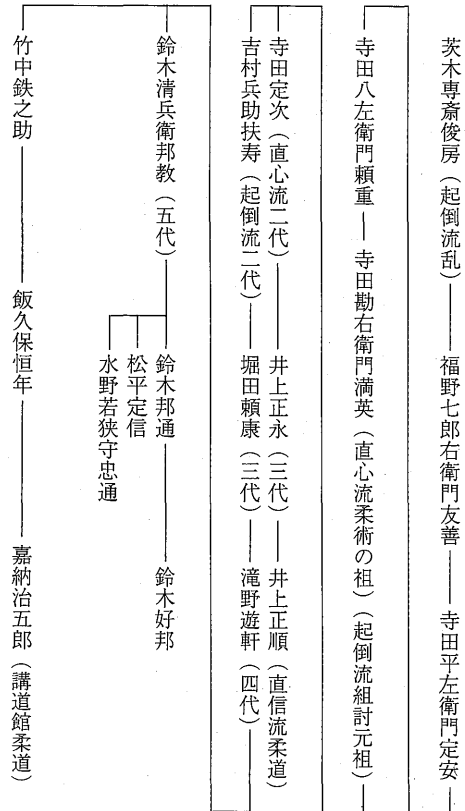


図1 起倒流の系図

道として修行者に説いていたのである。

また寺田満英は、直心流柔術の祖としても有名であった。そして満英から三代後の井上正順は、技の修行を通して「寛柔温和の徳によって世を廻していく人を作る⁷⁾」という術を越えた道の意義を持たせ、享保九年（1724）に、歴史上初めて柔道と称した直信流柔道を創始している。いってみれば起倒流も直信流も、元をたどれば寺田満英より出ており、満英が禅や儒教を十分に学んでいたとすれば、直信流柔術の系統が後に直信流柔道と称したように、起倒流組討の系統も、やがては柔道と改称する運命にあったと考えられる。

ところで、起倒流組討の系統では、満英の門に吉村兵助扶寿（二代）が出て、松江の藩士にして同門に傑出し、次いで滝野遊軒（四代）は起倒流を江戸に大いに広めた。遊軒は享保年間に浅草三筋町（江戸）で教え、門人三千人とも言われ、起

倒流を天下に流布するに貢献した。この滝野遊軒の門下に鈴木清兵衛邦教（五代）がいた。邦教は享保七年（1722）に生まれ、「寛保元年（1741）二十歳の時に相続して御天守番となった⁸⁾。」又明和9年（1772）日光御社参の御供を命じられた時、「神慮にかなわば一二年のうちにならず弟子も多くなるべしと祈誓してける。その年のうちに大名ばかりも多く入門しなければ神慮にかなひしことと思うとのこと多し⁹⁾」と記しており、現に多くの大名が入門している。この中に白河藩主、後に寛政の改革を主導した老中首座の松平定信がいた。定信が邦教の門に入ったのは天明二年（1782）八月、二十五歳の時であった¹⁰⁾。

松平定信は、「生来蒲柳の質で、この年も正月頃から口中の悪性腫瘍に悩まされ、入門の直前まで体の不調が続き、柔道の効果については全く疑問視していたという¹¹⁾。」そこで「天明二年八月比に有けん、鈴木清兵衛邦教にたよりて起倒流の柔道をまなぶ。そのまえより水野中務少輔・奥平大膳大夫、九鬼長門守らみな予をすすめけれども、清兵衛の術はみょうじゅつにて、人君学べば忽に上達なすなど、あらぬ妙をききしかばここに疑ひて決せざりけり、ことしやうやうまなぶ。学べる日よりその術の正しくして、聖賢の道にも正當なる事をさとりて、それより学び侍りぬ¹²⁾」と記されている。このことから、定信は鈴木邦教より柔術ではなく起倒流柔道を学んだことがわかる。そしてこの柔道により健康だけでなく、聖賢の道をも体得し、やがて寛政の改革を断行していくのである。ところで何故、鈴木邦教は柔術ではなく柔道と呼んだのであろうか。

松平定信の書ける『修行録』には「鈴木清兵衛といふもの柔道といふことをとて、諸侯にもあまたそれが弟子となりけり。予にもその門に入よと人々いへど決せず。九鬼松翁、その比は長門守とかいひしが、しきりにすすめてついに其道に入にけり。清兵衛の妙術はもとよりいふに及ばず。剣術十何流。柔術何流かを学びきわめて、その家にいささか書をける神武の道を、人に教へものせんとはかりしにて、その神武の道、一子相傳とあるを人にほどこさんもいかなりて、明和九年日光御社参の御供して祈誓してけり。されどこの人学問なければにや、学問せぬものなどといへば、偏固篤実の老人、一術に達したる人よくいふことにして、それをききて又何かとそしるものも

あれど、予はその道のふかく信ずべきことをしり得てけり¹³⁾」と記され、鈴木邦教が、鈴木家に昔から伝わっていた「神武の道」を起倒流に取り入れることによって、起倒流柔道を開いたというのである。

このように見てくると、寺田満英（起倒流組討元祖、直心流柔術の祖）は禅や儒教を学び、術だけでなく柔の道の大切さを藩士に指導していたことがわかる。寺田はまだ直心流柔術と称していたが、その後井上正順により1724年に直信流柔道へと改称されたのである。この改称が、起倒流柔道の名称に大きな影響を与えたことは疑いないだろう。起倒流系統では寺田満英の四代後の鈴木邦教により、代々鈴木家に伝わる「神武の道」の教えを取り入れて、新たに起倒流柔道と改称したのである。時は鈴木邦教が家督を相続した寛保元年（1741）のことと考えられる。

3. 起倒流柔道の思想について

前章で見たように、起倒流柔道の名称の背景には、鈴木家に代々伝わる「神武の道」があったといえよう。

それでは、この「神武の道」とは如何なるものであったのだろうか。起倒流柔道を鈴木邦教の基で修行した松平定信は『兵法大意口伝抄』の中で、神武の道について次のように記している。まず「人は天地也。天地は人也。それ天地もと一物也。その氣のすめるはのぼりて天となり、濁れるものは下りて地となる。その氣天地に満て間断なし¹⁴⁾」と記し、気により我々の住んでいる天地は成り立ち、人間も又この天地に充滿する気により成り立っていると説いている。そしてこの気は人の呼吸にしたがって鼻口より入り、全身を巡り「人の病で死するは呼のみにして、吸なく、體中みなその氣を尽さんとすれども、天地の氣満にあたるときは、をのずから人の支體も穴よりして、みなその氣をみたまむ。故に死することなし¹⁵⁾」とされ、人間はこの氣を吸い込み、気が体中を充滿している時は、人間は大いなる活動ができる、と説かれている。

それでは、如何にして天地の氣をわが体中に周旋せしめるかとなれば「わが肩を平らにして肺金を安んずる時は、心火下につく。これによって人の偏倚、人の病苦を察するに、一つも違ふことなし。五臓全くそなわり。天地の氣體中に充滿する

時は、則神人といふ。矢石といへども犯すことなし¹⁶⁾」と記され、肩をいからせずに平らにすることにより、天地の気を充滿できる、と説かれている。そして胸中ものなく、五臓が整っている時こそ天地と我とがひとつになった、神人合一の境地が開けてくる、と説かれているのである。ここに、神人合一の境、つまり「神武の道」があったといえる。

又この書には、神人合一の境地として誠の大切さもあげている。「天地は誠の外に物なし。人も又しかり。夫婦交感の時一毫の他念なく、その誠一つに合する時は、則子を生ず。故に人はその誠を受けて生ず。これ生々しても一つ誠に帰するゆえん也。されば組打対陣また外に論なき事しるべし。わが誠あり。故に人をしてその誠をまさしむ。両誠一つに混ずれば、人と我とをわかつ。ここに至ては、鏡を見るにたとふ。また物なし。われ勝つことなし。故に人まくる事なし。われまけず。故に人かつことなし。只一つ誠あるのみ¹⁷⁾」と記され、誠を尽くすことにより、我に敵なし、人に敵なしの境地になれる、と説かれている。そしてこの誠たるや、言語ではいい尽くせず「誠よかつかちする事なし。みるべからず、きくべからず。故に誠より感ずれば応じ、応ずれば感ず。声にひびきの応じ形にかたの随ふが如し、百里をへだつといへども、その感、その応、間に髪をいるるのひまなし。感応の理はいひがたし、是もまた鏡戦の道理也。身に得ずしては、しるべからず¹⁸⁾」とされ、誠は感じて邪心なく応ずという境地だと述べている。言い換えれば「寂然不動感じて遂に天下の故に通ず¹⁹⁾」のそれであり、我が心に邪心なく、天と一体となった境地であったといえる。

こうして見てくると「神武の道」とは、天地を貫く気を体中に充滿させ、何の邪念もなくまさに感応に従う誠の心を貫くことにより、神人合一の境地に至る道であったといえる。鈴木邦教が柔術でなく柔道として世に発表した背景には、こうした「神武の道」に基づく思想があったものといえる。又この教えは「別伝神武の秘訣」として鈴木氏が修行者の位に応じて与えていったのである。

ところで起倒流の修行体系は、当初より二十一本の形の実技と五巻の書（『本体』『天巻』『地巻』『人巻』『性境』）の習得からなっていた。『本体』とは修行者に最初に授けられる教えであり「本躰は体の事理也。専ら形を離れ気を扱えば正を得ず。

理のみにては気を扱うことを知らず。静貌いたるところ静氣を得て、敵の強弱よく徹す²⁰⁾」と記され、まず静貌静氣の必要なることが説かれた。次いで『天巻』では「我力を捨て敵の力を以て勝。然らずして吾力を頼み、我力を出す心あらば、勝利全からず。勝利全き所、貌は敵に随て変ずれ共、我心不動にして正静なる時は、得利せずんばあるべからず²¹⁾」とされ、勝負に臨んでは敵の力に順応し変幻自在に対処すると共に、自分の心は常に不動であることが大切だとされた。又『地巻』には、「敵に柔剛強弱の事」「無拍子の事」「調子の事」「位の事」「先々先後先の事」「水上之胡芦子の事」「気体の事」「志気力差別の事」「前後際断の事」の九つの教えがあり、勝負の際の心構えや技について説かれていた。そして『人巻』に至って、二十一本の技名が具体的に列記されている。最後に修行者は『性鏡』の巻で「二勢中」「五行中」「陰陽中」「性」「心機」「忘気」「大極」といった陰陽五行のことや、心気について学んだのである。このように『地巻』『人巻』の二巻は技術について述べられ、『本体』『天巻』『性鏡』の三巻は勝負についてはほとんど論せず、人の至るべき道徳を論じたものといえよう。なお「本体と性鏡巻は茨木専斎の求めに応じて沢庵が記し与えたものとし、天. 地. 人の巻は ~中略~ 吉村扶寿の著作なり²²⁾」とされている。

ところで、当初は起倒流組討の名称であったのが、1741年に起倒流柔道になったことは前章で述べた。起倒流柔道という名称で著された伝書には、文化三年（1806）水野若狭守忠通^{ただゆき}の著した起倒流『柔道雨中間答』がある。著者の水野忠通は、起倒流柔道と名付けた鈴木邦教の高弟で、延享四年（1729）に生まれ、以後長崎奉行、江戸では勘定奉行の要職についている。恩師邦教の子邦道が三十二歳の若さで死去して後は、養子好邦の後見役として、鈴木一門の重鎮の地位にあり、そうした地位と使命感が『柔道雨中間答』の著述の動機となったと考えられる。この書の全体に通じて述べられている内容は、柔術と柔道との違いについてである。例えば「道と術と本一体也。然ども事理体用のたがいあり。然る時は術は用にして技芸也。故に形体の事を尽して勝負をいう。道というは、直道にして明德至善の修行をなさしむ。然れども技芸を能く尽さざる時は、道徳の位に至りがたし。是を以て、先ず術を鍛練して熟して後

捨て勝負をはなれ、吾が邪曲を矯め、善道を進むの理を説き、天地自然の事を導く也²³⁾」と記され、術は重要だがあくまで手段であり、目的は己の邪心を矯め善道を行うことであり、それが柔道だと説かれている。

又「思正しく邪無きときは天下に敵なし。敵なきときは誰とか争はんや。故に勝負の論なし。例えば向ひ来る敵ありといへども、愛情を以是に向う時は、敵その情感通じて、彼も又邪なく自ら和ぐ。故に我思いのままに扱ふ事自在なり。故に当流道の字を以て要とす²⁴⁾」と記され、愛情を以て相手と接することにより、無敵の境地に至れるというものである。そうとはいっても、武門においては術は大切なのであり「諸芸ともに事を専らにして、進退周旋、起居動静の働熟して、自在ならざれば叶はざる事也。然どもそれのみにして善となす時は、終身天理自然の事理に闇くして、卑劣の事に流弊す。ゆえに業を熟して後速に捨て、天地一枚、神人一体の道を修練する時は、天地自然の事理備わり實の柔道に至るべし²⁵⁾」と記され、術を尽くして後速やかに捨て、天地の運行と一体となった、善の心で社会に尽くしていくことが柔道である、と説かれているのである。天地一枚、神人一体の言葉には、明らかに鈴木邦教が取

り入れた「神武の道」の教えが見られる。

更に、天下の事に柔道は応用できるかについて「柔道は第一に己が邪曲を矯めて直道に帰す修行なれば、勝負の事のみならず。修行熟すに至りては、事を尽くして事を捨て、只寂然不動の場に至るの位なれば、天下の事にとりては政の譬にこれを云。一人の上にとりては身を治る事に之をいい、既に格物致知より平天下の事に至る事明か也²⁶⁾」と記され、天下を治めていく政治の世界にまで応用できると説かれている。最後に、年齢に応じた柔道の修行法については「事の取廻しは、五十歳を越えると、壮年の如くに成しがたかるべし。然れども、心気の事理、天地自然の事は、呼吸の通ひ歩行の成らん限りは替る事なかるべし。道の位に至りては、諸道以てしかり²⁷⁾」と記され、事は五十歳を過ぎると落ちていくが、心気の事や、天理自然の境地はこの頃から研究していくべきだと説かれている。又ここに術を専らとする柔術と、道も重んじる柔道との違いがあるといえよう。

このように見てくると、起倒流ではただ単なる勝負の法にとどまらず、自然界の働きと一体となり（神人合一）邪心を去って、人々に善道を施していくという、術を越えた道の意義をはっきりと打ち出していた。こうした思想が、柔術（組討）

表1 『柔道雨中間答』における柔術と柔道との違い

| 柔術 | 柔道 |
|-------------------------------|--|
| 術は用にして技芸也。形体をつくして勝負をいう 23) | 術つくして後これをはなれ我邪曲を矯め、善道を行う 23) |
| 敵と争う勝負の法 24) | 思正しく邪無き時は天下に敵なし。愛情を持って向かう時は、彼も又和ぐ 24) |
| 事を専にし、進退周旋に熟するを専とす 25) | 業を熟して後速に捨て、神人一体の境を体得する道 25) |
| 術を修行し、勝負を争うを専とす 26) | 一人の上にては身を治め、やがて平天下の事に至る道 26) |
| 青壯年の時、事の取回し、術の修行を専とす 27) | 五十歳を過ぎても、心気の事理や天理自然の事を研究できる修行道 27) |

ではなく柔道という名称に変えた理由といえるだろう。

4. 起倒流柔道の技について

さて、起倒流の技術をみってみると次のようになる。起倒流乱の茨木専斎は、体（自然体）、車（回転技）、請（受）、左右、前後を基本に、次で、行連、行違、行当、身砕、谷の五種を奥、更に外物として、取合、引落、後詰、責、嵐、風車、楯合、拔身、生捕縄、坂、橋、水中、船、馬上の十五所作に至るように構成した²⁸⁾。

起倒流組討二代吉村扶寿の時に至って、表の形として体、夢中、力避、水車、水流、曳落、虚倒、打碎、谷落、車倒、鋳取、鋳反、夕立、滝落の十四本、裏の形として身砕、車返、水入、柳雪、坂落、雪折、岩波の七本、又併せて、小尻反、柄取、諸手取、二人捕、四人詰、戸入、鎧組（附馬上）、居合、早縄、中が作られた²⁹⁾。ただ諸手取、二人捕、四人詰の三ヶ条は「容易に事に施しがたし。無拍子の深理を会得せざればひろめがたし³⁰⁾」として、享保17年に省かれている。

こうした所作のうち、起倒流で最も重視されたのは表十四本、裏七本の「形」であった。この二十一本の「形」は鎧組討の形であり、また「当はいかほどの大力にても手一つの力也。投は敵の五体の重みを以てする故甚だつよし³¹⁾」と記され、当身技よりも投技に重きを置いていた。そしてこの表十四本の形については「都て十四形は本を務の意にして、我本体を堅固になし、手足屈伸進退を練せしむる形也³²⁾」と記され、本体という押されても引かれても動じない姿勢を作ることにあつたと説かれている。一方、裏の七つの形は不取段とも言われているが、それは「不断修行に気の段をとらぬという儀也。勝負の業にも自然と叶ふ事也³³⁾」とされ、各技を区切ることなく、連続して行うように説かれている。そしてこの二十一本の「形」は、起倒流柔道においても「十四形を合せて七つとす。是を以て表裏二十一の形とす³⁴⁾」とされ、技名、内容共そのままうけつがれていった。

この表十四本の形を解説すると次のようになる。

○表十四本

体：受が両手で取の帯を取り腰投を掛けようとする。取は本体を守り、体を落と

して受を倒す。

夢中：受が腰投をかけようとするのを、取は本体を守り、次いで身を捨てて、己の体越しに投捨てる。

力避：受が両手で取の帯を取ろうとするのを、取は受の後ろに回り両手で受けを真後ろに倒す。

水車：受が両手で帯を取ろうとするのを、取は受け流して、受の右肘を眉間に押さえ、取と受は向かい合い、後方に投げ捨てる。

水流：受は短刀を右背後に隠し持ち、左手で取りの胸倉を取ろうと前進。取はその手を取り受をその前方に引き崩す。

曳落：受が取の体をねじ倒そうとかかってきたのを、取は体を左右に開き、受をその右前に引き落とす。

虚倒：取、手刀で受の眉間をついていく。受がその手を取り腰をいれようとした瞬間、取は取られた手を利して受を仰向けに倒す。

打碎：取、左手刀で受の腹部を攻む。受はその手を取り腰投にいこうとするのを、取は本体を守り、逆に左後隅に投げ落とす。

谷落：受が取を前方に倒そうとするのを、取は前傾してその攻撃を外す。と同時に取は受の体を左膝越しに投げ落とす。

車倒：受が取りの体をねじ回し崩そうとするのを、取は受の回す力に順応し、受の足下に大の字に捨て、己の体越しにその前方へ投げ捨てる。

鋳取：受が取の帯をとろうとするのを、取は腰を引きながら左手を腮にあてて崩す。右手は受けの右肩にあてて、受を右膝越しに引落とす。

鋳返：受、取りの帯を取る。受引きつけて腰をいれようとするを取応じて受けを首にて制す。受が返そうとする瞬間、取体を捨てて仰向けに引倒す。

夕立：取、受の両襟を右手でとる。受は足を進め腰投に掛けようとする。取はそのかけんとするを利して、左に落とす。

滝落：取、右手で受の両襟をとれば、受、腰投に入らんとす。取はその瞬間、その

体を背後から抱きかかえ前方へ崩し、
体越しに投げずてる。

こうした表十四本の「形」を、技の原理から分類してみると、次のようなことが言えるだろう。

| | |
|----------|-------------------------|
| 体、夢中 | 体さばきによる崩しを教える |
| 力避 | 体さばきで組まずに倒す事を教える |
| 水車、水流、曳落 | 間接技（前腕部を掴む）から投技への連絡を教える |
| 谷落、車倒 | 後方攻撃に対する捨身技を教える |
| 鋳取、鋳返 | 前腕部、首を制してからの投げを教える |
| 夕立、滝落 | 襟袖を掴んでの投げを教える |

一方、裏の七本は不取段ということで、技を一つ一つ区切ることなく、連続して行う所に特徴があった。

身 碎：受が右腰投げで投げようとするのを取は腰を落とし、右手を受の左脇下に深く差し入れ、自分の体を仰向けに捨てながら前方へ投げ捨てる。

車 返：受が取の両肩を突いて押す。取はその上膊部をすくいあげながら、体を仰向けに捨て、受を体越しに投げ捨てる。

水 入：受は取の肩を突き押し崩す。取は体をそらせ、両足を受に滑り込ませ、受を体越しに投げる。

柳 雪：取は受の顔面をすりあげる。受が体をそらせた瞬間、両足を滑り込ませ体越しに投げる。

坂 落：受は手刀で取の腹部を突く。取は体を開いて攻撃を外すと同時に、受の両手を強く引き下げて引き倒す。

雪 折：受が背後から抱きすくめるを、取は右背負投で投げ落す。

岩 波：取は受の顔面に両手霞をかける。さらに両足を受の右足外側に滑り込ませ、両手の引きで前方へ投げ捨てる。

裏七本も、技の原理から分類すると下の表のようなことが言える。

| | |
|-------|----------------------|
| 身碎 | 前腕を制しての投げを教える |
| 車返、水入 | 突いてくる上腕を引き崩しての投げを教える |
| 柳雪、岩波 | 当身技から投技への連絡を教える |
| 坂落 | 前腕を掴んでの投げを教える |
| 雪折 | 後方からの攻撃に対する背負投を教える |

こうして見てくると「起倒流の形」では、横捨身技、背負投を除いて具体的に手、足、腰を使った投技は示されていない。しかし二十一本の「形」全体に見られるのは、自然体の働きにより、相手の力を利用して、崩して投げる、という投技の原点を教えている。また当身技、関節技も、殺傷を目的とするのではなく、投技への連絡として用いられている点に特徴があった。嘉納師範は明治十四年（二十二歳）起倒流の飯久保恒年に入門し、二年後に免許皆伝を受けた。師範は「起倒流の形」が、技術的にも理論的にも優れているとしてそのまま「古式の形」として、講道館柔道の形の一つとして残している。又この「起倒流の形」の講道館柔道の乱取技への影響としては、起倒流の横捨身技は、自分の体を仰向けに捨てながら、前方へ投げ捨てる技であり、講道館柔道の捨身技「横分れ」に影響を与えたと考えられる。更に起倒流の「谷落し」はそのまま今日の捨身技「谷落し」に受けつがれ、「雪折」は後方から抱きかかえられた時に施す背負投であったが、今日の背負投にも影響を与えたといえる。

5. まとめ

(1)起倒流組討元祖寺田満英は、直信流柔術の祖としても有名であった。この直信流系統では、1724年に歴史上初めて柔道と称した直信流柔道が生まれた。一方、起倒流系統でもこうした動きに触発されると共に、鈴木清兵衛邦教が鈴木家に代々伝わる「神武の道」を採り入れ、寛保元年(1741)に起倒流組討を起倒流柔道の名称に変えた。

(2)「神武の道」の教えは、天地を構成する気を体内に採入れ、体中に充満させ、天地の働きと我とが一つになった、神人合一の境地を体得することであった。又起倒流では「術は用にして技芸也、道は直道にして明德至善の修行也」とされ、術を通して直なる道、善なる道を体得すべきだ、とされた。こうした神人合一の境地、直道、明德至善を行う所に、起倒流柔道の「道」の思想があった。

(3)「起倒流の形」は表14本、裏7本の計21本の鑑組討の形であったが、それらは自然体の働きで、相手の力を利用して、崩して投げるといった投技の原理を教えている。又自身、間接技も相手を殺傷するのではなく、投技への連絡として用いられていた。とりわけ、起倒流の中で自分の体を捨てて頭越しに相手を投げ捨てる横捨身技は、講道館柔道の「横分れ」に、又起倒流の「雪折」は、後方攻撃に対して背負う技であったが、今日の背負投に大きな影響を与えたと考えられる。嘉納師範は、「起倒流の形」を技術的にも理論的にも優れているとして、そのまま「古式の形」として今日に残している。

註

註1) 老松信一(1963):起倒流柔術について。順天堂大学体育学部紀要, p 24~29に見られる。

引用文献

- 1) 嘉納治五郎(1899):柔道一般並に教育上の価値。(編)渡辺一郎(1971)「史料明治武道史」, 新人物往来社, 東京, p 86
- 2) 桜庭 武(1935):柔道史攷, 第一書房, 東京, p 92~93
- 3) 柳生三厳(1637):起倒流乱目録。「月之抄」
- 4) 寺田正浄(1729):登假集。(編)渡辺一郎(1979),「武道の名著」, 東京コピー出版部, 東京, p 175

- 5) 福田明正(1965):雲藩武道史。今井書店, 松江, p 24
- 6) 福田明正(1965):雲藩武道史。今井書店, 松江, p 29
- 7) 井上正順(1729):柔道中央書, 柔大。旧武専謄写本
- 8) 渡辺一郎(1979):武道の名著。東京コピー出版部, 東京, p 187
- 9) 松平定信(1942):字下人言, 修行録。岩波書店, 東京, p 182
- 10) 水野忠通(1806):柔道雨中間答。(編)渡辺一郎(1979),「武道の名著」, 東京コピー出版部, 東京, p 187
- 11) 渡辺一郎(1979):武道の名著。東京コピー出版部, 東京, p 187
- 12) 松平定信(1942):字下人言, 修行録。岩波書店。東京, p 53
- 13) 松平定信(1942):字下人言, 修行録。岩波書店。東京, p 182
- 14) 板沢武雄(1943):天壤無窮史観。日光書院, 東京, p 178
- 15) 板沢武雄(1943):天壤無窮史観。日光書院, 東京, p 182
- 16) 板沢武雄(1943):天壤無窮史観。日光書院, 東京, p 184
- 17) 板沢武雄(1943):天壤無窮史観。日光書院, 東京, p 187
- 18) 板沢武雄(1943):天壤無窮史観。日光書院, 東京, p 188
- 19) 板沢武雄(1943):天壤無窮史観。日光書院, 東京, p 190
- 20) 小野政方(1798):起倒流本体。(編)今村嘉雄(1966)「日本武道全集巻5」, 人物往来社, 東京, p 363
- 21) 小野政方(1799):起倒流天巻。(編)今村嘉雄(1966)「日本武道全集巻5」, 人物往来社, 東京, p 364
- 22) 今村嘉雄(1983):日本の武道。講談社, 東京, p 185
- 23) 水野忠通(1806):柔道雨中間答。(編)渡辺一郎(1979):「武道の名著」, 東京コピー出版部, 東京, p 191
- 24) 水野忠通(1806):柔道雨中間答。(編)渡辺一郎(1979):「武道の名著」, 東京

- コピー出版部, 東京, p 191
- 25) 水野忠通 (1806) : 柔道雨中間答. (編)
渡辺一郎 (1979) : 「武道の名著」, 東京
コピー出版部, 東京, p 197
- 26) 水野忠通 (1806) : 柔道雨中間答. (編)
渡辺一郎 (1979) : 「武道の名著」, 東京
コピー出版部, 東京, p 198
- 27) 水野忠通 (1806) : 柔道雨中間答. (編)
渡辺一郎 (1979) : 「武道の名著」, 東京
コピー出版部, 東京, p 200
- 28) 老松信一 (1963) : 起倒流柔術について,
順天堂大学紀要 6, p 28
- 29) 小野政方 (1801) : 起倒流人卷. (編) 今
村嘉雄 (1983), 「日本武道全集巻 5」. 人
物往来社, 東京, p 372
- 30) 水野忠通 (1806) : 柔道雨中間答. (編)
渡辺一郎 (1979), 「武道の名著」, 東京コピー
出版部, 東京, p 196
- 31) 入江康平 (1992) : 柔術関係史料上巻, 筑
波大武道論研究室, p 226
- 32) 水野忠通 (1806) : 柔道雨中間答. (編)
渡辺一郎 (1979) : 「武道の名著」, 東京
コピー出版部, 東京, p 201
- 33) 寺田正浄 (1729) : 登假集. (編) 渡辺一
郎 (1979), 「武道の名著」, 東京コピー出
版部, 東京, p 181
- 34) 水野忠通 (1806) : 柔道雨中間答. (編)
渡辺一郎 (1979), 「武道の名著」, 東京コピー
出版部, 東京, p 201